

しなのなるほやのす、きも風ふけばそよくさこそいはまほしけれ
顯昭云、はやのといふ所しなの、國に有、その所にあるす、き也、或書にはちゐさやかなるす、
きなりとかきたれど、それはいかとおぼゆ、

〔無名秘抄〕上 一雨の降ける日、或人のもとに、おもふどちさしあつまりて、ふるき事などかたり出
たりけるついでに、ますほのす、きといふはいかなるす、きぞなどいひしろふ程に、ある老人
のいはく、わたのべといふ所にこそ、このことしりたるひじりひとりあるとき、侍しかども、い
まだ尋きかすといひ出たりけり、登蓮法師その中にありて、この事をき、詞すくなになりて、又
とふこともなく、あるじにいふ様みのかさちとかしたまへといひければ、あやしと思ひながら
とりいでたり、物がたりどもき、さして、みのうちきわらぐつさしはきて、いそぎ出けるを、人々
あやしがりて、そのいはれをとふ、わたのべといふ所へまかるなり、年比いぶかしく思ひ給へし
ことを、しれる人ありと聞て、いかでか尋ねにまからむといふ、おどろきながら、さるにても雨や
めて出たまへといさめけれど、いでやはかなきことをのたまふかな、命は我も人も雨のはれま
など待べき物かなにごとも今しづかにとばかりいひすて、いにけり、いみじかりけるすき物
かな、さてはいのごとく此所へゆき、たづねあはせて、とひき、ていみじう秘藏しけり、このこと
第三代の弟子につたへならひ侍ける、此薄のこと同じさまにてあまた侍也、ますほの薄まそを
のす、きますうの薄とて三品ありますほのす、きといふは、ほのながくて一尺ばかりあるを
いふ、かのますかゝみをば、万葉集には十寸鏡とかけるにて心うべしまそをのす、きといふは、
眞麻の心也、俊頼朝臣よみ侍る、まそをの絲をくりかけてと侍るとよ、絲などのみだれたるやう
なり、ますうのす、きとは、まことにすはうなりといふ心なり、ますはうのす、きといふべきを、
ことばを略していふなり、色ふかき薄の名なるべし、是古集などにたしかにみえたることはな